

# 文学の源泉

村田裕和

## 温泉文学のホットスポット

もう四半世紀も前のことだが、伊豆半島を徒歩で旅したことがある。

東海道線三島駅を出発し、葦山反射炉を見学して、修善寺温泉で一泊。翌日は湯ヶ島まで歩き、三日目に天城トンネルを抜けて湯ヶ野に至り、四日目に下田に着いた。下田では日本最初の米国総領事館が置かれた玉泉寺を訪れたはずだが、記憶が定かではなく、どこかの駅前の食堂で食べた秋刀魚の刺身がおいしかったことばかり今もはっきりと覚えている。

当時、私はまだ「温泉文学」という言葉を知らなかった。

「温泉文学」を、文学ジャンルとして提唱したのは、川村湊『温泉文学論』（新潮新書、二〇〇七年）が最初であろうか。同書で主に扱われている作品は、『金色夜叉』から『雪国』『天城越え』『銀河鉄道の夜』『満韓とこのころ』『城の崎にて』『秋津

温泉』『大菩薩峠』『黒谷村』、漫画『ゲンセンカン主人』まで多岐にわたる。これだけでも温泉／温泉地がきわめて重要な文学空間であることは明らかだ。

その重要性を膨大な作品データによって実証したのが、他ならぬ浦西和彦編著『温泉文学事典』（和泉書院、二〇一六年）である。この事典は、温泉に関する近代文学作品を作者別に分類して、その書誌情報と内容（あらすじ）をていねいに紹介している。版元のホームページには、本書の「特徴」が次のように紹介されている。

- ・四七三名の作家による、温泉に関する八五三作品を収録。
- ・登場する温泉は約七〇〇ヶ所。
- ・郷土再発見・町おこし・観光案内・旅の計画・温泉イベント・温泉エッセイなど幅広い用途に使えて便利。
- ・温泉・作家・作品が一目で分かる索引（都道府県順）付き。

つまり、一般市民に向けて娯楽性や実用性をもたせた読み物の事典をめざしたということであろう。本書のカバーには、手ぬぐいを頭に載せて湯につかる夏目漱石（おもて）と芥川龍之介（うら）の軽妙な雰囲気のカットがあつて、地域の図書館などで手に取ってもらいやすい装幀となつている。

また、巻末には「温泉地別作家作品名索引（都道府県順）」が付いていて、訪れてみたい（訪れた）温泉地には、どのような作品が関係しているかが一目でわかつて便利である（海外の温泉もある）。欲をいえば、個人で購入するには六〇〇〇円（本体）は高価なので、旅に持参できるポケット版を作つてほしいところだ。もしポケット版ができるなら、温泉地を見出しとして、北から温泉ごとに作品解説が並んでいると、また別の角度から楽しめるのではないかと思つてみたりもする。

私が歩いた伊豆半島は温泉文学のホットスポットである。修善寺温泉は言わずと知れた夏目漱石の「修善寺の大患」の舞台。湯ヶ島では、川端康成と梶井基次郎が交流し、梶井の「冬の蠅」『創作月刊』一九二八年五月、「闇の絵巻」『詩・現実』一九三〇年九月）などの名作が生まれた。また、井上靖が幼少期を過ごした場所でもある。国語教科書で『しろばんば』（中央公論社、一九六二年）の一節に出会い、その後自伝三部作を読んでいた私にとつて湯ヶ島は、ぜひとも訪れてみたい場所だった。

時あたかもバブル崩壊後の一九九四年。戦後に隆盛をみた巨

大温泉地が見る影もなく衰退していった時期であつたが、伊豆の山中は、そうした温泉地の栄枯盛衰から置き去りにされたかのように静かであつた。

### サンプル解析

しかし、こうして思い返してみると悔いの残ることが一つだけある。それは他ならぬ温泉を十分に堪能しなかったことだ。当時の私は、文学碑をカメラに収めることしか考えていなかったらしい。もし、その時『温泉文学事典』があつたなら、私は温泉というものの「効能」について、もっと真剣に考えただろうし、のんびり湯につかることも「研究」なのだと自分自身に言い聞かせることができたはずだ。

『温泉文学事典』は、趣味や実用方面での読者を十分に意識した作りになっている。その上、事典に登場する温泉がどこにあるのかを示す『温泉文学事典』地図」がインターネット上で公開されている。地域ごとに色分けされた地図を、画像ファイルで閲覧するようになっていて、これなら旅先でもスマホで確認できる。事典を購入していなくても閲覧できるところがうれし。

本書の企画がどのように出発したのか私は知らない。しかし、文学研究の専門家でない人に向けられた本書の本作りにも、編

者・浦西和彦の仕事の特質が表れているように感じられる。その最大の理由は、氏の書誌研究の緻密な仕事、けつして学術的なものではなく、その反対に、デモクラティックともいえるようなものだと思われているからだ。

周知の通り浦西氏には、数多くの事典や書目の仕事がある。いずれの仕事も、個人的な主観によって資料を選別したり、ニュース性のある逸文だけを「発見」してみせたりするのではなく、膨大なデータを網羅し、一定の基準（作家名、ジャンル、テーマなど）に基づいてそれらを分類して提示するという学問的手法において一貫している。

その研究方法は化学や生物学のサンプル解析に近く、こうした「基礎研究」がなければ、文学研究は一步も立ちゆかないといった性質のものである。また、その解析されたデータは、公共空間に置かれることによって、誰もが利用可能なものとなっている。デモクラティックであるという特質は、科学的精神によってもたらされたものなのである。

また、浦西氏の仕事の先駆性は、インターネット検索全盛の時代にさきがけて、膨大な情報の海を文字通り徒歩で渉猟したところにある——とひとまずは言えるだろう。このことの偉大さはどれほど強調してもきれない。

だが、氏の研究のどれ一つをとっても、現代の情報検索装置によって解消されてしまうようなものはない。氏の仕事がすべてデジタル・データベース化されてインターネットで検索・閲

覧できればそれほど便利かと思うが、このことは、インターネットが氏の研究を加速・増強しうる可能性を示唆するにすぎず、その逆ではない。

インターネットがあろうとなかろうと、丁寧に資料を探索して、整理し、公開するという実証的研究の根幹は変わりなく、むしろ現代においてこそ、浦西氏がおこなってきたような正確なデータの蓄積はますます重要性を増している。

### 境遇と運命

さて『温泉文学事典』をいくつか拾い読みしてみよう。ここには先述の通り八五三作品の書誌情報とあらずじが収められている。中でも、もつとも多くの作品が採録されている作家は川端康成である。初期の「ちよ」(『校友会雑誌』一九一九年六月)から、『雪国抄』(『サンデー毎日』一九七二年八月三日)まで、三十九編ある。

「ちよ」は、死んだ男から送られた五十円で修善寺温泉にかけた「私」が、「ちよ」という旅の娘と出会い、その後、次々と「ちよ」という名の女と出会う物語である。「私」は不気味に感じて、「やつぱり、今でもあんなに私をみつめているあの霊どもと、同じように、肉体をぬぎすてた霊の姿にならなければこの怖れはのがれられないのでしょうか」と思う。

温泉地の集落や宿を描いた作家は多いが、浴場そのもの、湯そのものを物語の重要な空間・要素として機能させている点でも、川端は「温泉文学者」と呼ぶにふさわしい。なにゆえ、川端は温泉をくりかえし描こうとしたのか。

川村湊『温泉文学論』（前掲）は、川端のエッセイにも触れながら、温泉は「肉体と精神、形而下的な身体と形而上の靈魂」とが融合する場所なのであり、現実の世界が非現実、超現実の世界へと変わってゆく「場所なのだ」と述べている。身も蓋もない言い方をすれば、人間存在が赤裸々に現れる場所ということになるだろう。

川端自身はエッセイ「伊豆の娘」（『婦人公論』一九二五年八月）で、宿屋の女中についての感想として、「境遇と運命」が一本の線になって現れると書いているが、この言葉は、彼の温泉文学全体にもあてはまるようだ。温泉に浸かった肉体の向こうには、生のもろさやはかなさ、人間の境遇・運命・孤独といったものが見え隠れする。

人間の運命あるいはその靈魂があらわになる場所としての温泉。芥川龍之介の短篇「温泉だより」（『女性』一九二五年六月）は、検体を約束して大金を得た大工の男が、達磨茶屋の女に熱中したあげく、共同風呂の底に沈んでみずから死ぬという話である。この男女のあいだにできた子も、今では茶屋通いばかりしているという。男と女とその子のあわれな運命を客観視する物語は、川端のいう「境遇と運命」そのものである。

志賀直哉「城の崎にて」（『白樺』一九一七年五月）もしかし。近代作家たちは温泉に浸かりながら、いつも命というものの虚無を厳粛な面持ちでのぞき見ていたのだろうか。

浦西氏の「はしがき——温泉愛好者にお薦め」には、こんなふうにかけてある。

温泉地も時代とともに著しく変貌を遂げていく。戦後、ことに昭和三十年代以後、日本経済の急速な発展によって、交通網も整備された。全国的に高速道路が配置され、車社会となつて、どんな山奥の辺鄙なところにある温泉地でも人々は手軽に出かけて行けるようになった。温泉地も観光資源となり、資本が投入されて、山奥の温泉地にも豪華な高級ホテルが立ち並ぶ。（中略）しかし、本事典を読めば、現在の温泉風景とは異つたものがそこに出てくるであろう。その時代々々特有の温泉風景や文化や人情が描かれていて、社会や時代の流れのなかで、いつのまにか変化していったものに出会うであろう。失われていったものも多くあり、改めて現代社会を再認識することができるのではないかと思う。

浦西氏のこの指摘を敷衍すれば、近代に「温泉文学」が発達し、温泉地を舞台として人間の運命が交錯するような「話」が多く書かれたことも、もう少し距離を置いて、文化的な視点

から読み解いてみる必要があるということになる。

たとえば、明治から大正にかけて、全国に鉄道網が整備され、避暑や避寒が容易になったことも一因だろう。またそこに、世俗の塵埃を忌避する文人趣味や、転地療養の習慣、あるいは柄谷行人のいう「風景の発見」のような認知パラダイムの転換などが関係していることも考えられる。

### 温泉の女、温泉に行く男

だが、そもそも温泉宿にのんびりと逗留することは、家事や育児に追われている者には不可能だ。独身既婚を問わず、近代文学の担い手の多くが男性で、その作品はインテリ男性たちを中心とする読者共同体によって消費されてきた。峠道で踊り子を追いかけたり、トンネルを抜けた先の温泉地で芸者となじんだりする「話」は、いくつもの暗黙の前提があつて成立する「話」である。

温泉地が、あらかじめ男性性をまとった空間であつたとすれば、温泉文学というジャンルもまた同様である。とりわけ、代表的な日本文学作品のひとつとされる『雪国』が、温泉地で出会つた〈運命の女〉を男が訪ねるといふきわめて典型的な温泉ロマンスであつたことは示唆的である。温泉文学が男性中心主義的だというよりも、むしろ、日本近代文学そのものの――

特にその非日常の空間を構成するセクシュアリティのあり方の――象徴が、温泉文学なのだと言つた方が正確かもしれない。

とはいえ、温泉文学のセクシュアリティも一樣ではない。川端作品の場合、「伊豆の踊子」『文芸時代』一九二六年一月、二月）や『雪国』（創元社、一九四八年）に典型的に表れているように、温泉地の女はその温泉空間の内部にとどまつて、内と外を往還するのは男だけである。男は、温泉Ⅱ女が現実世界によつて汚されることを望まない。一方、川端と双璧をなす温泉文学者の夏目漱石は、〈温泉の女〉が外部世界と接触する瞬間を描き出す。「草枕」『新小説』一九〇六年九月）がそれである。画工の「余」は、温泉で出会つた女「那美」を描こうとするが、男が探し求めた表情を女が見せたのは、従弟の出征という〈現実〉が彼女に突きつけられた瞬間だつた。これは温泉世界に対する一種のアンチ・テーゼであろう。

『明暗』（岩波書店、一九一七年）では、新婚の妻「お延」とそれが合わない男「津田」が、自分のもとを去つて行つたかつての恋人「清子」と温泉で再会する。清子は温泉世界の住人ではないものの、「草枕」の那美と同様に、男にとつて一種の謎を秘めた〈温泉の女〉である。

清子と温泉のイメージは重なり合っている。津田は迷宮のような温泉宿の内部をさまようが、この放浪は、心底の計り知れない清子の言動に津田が翻弄される姿と重なる。しかし津田は、清子に対して、けつして心地悪いものを感じていない。

男性視点人物に対して、女性が「謎の女」として対置され、その女が描かれる（視られる）対象であるという構図そのものはステレオタイプである。清子がこの後どう変化するかは分からないが、しかし、温泉（清子）の内部で男（津田）が心地よくたゆたうだけで物語が終わりになることなどありえない。温泉文学者・漱石は、インテリ男性の無意識という悪意、あるいは不器用さという傲慢を露呈するための実験空間として、温泉を（再）構築しようとしていたのではないか。

未完の温泉文学としての『明暗』。そういう視点で続きを想像してみるのも楽しそうだ。

\*

『温泉文学事典』は、発売から三ヶ月後に早くも第二刷が出ている。浦西氏は「温泉愛好者にお薦め」と「はしがき」の副題に書いていたが、何ととっても、温泉という気楽なテーマ設定が販売好調の決め手であったにちがいない。

ところで、『温泉文学事典』の約一年前に出た『文化運動年表 明治・大正編』（三人社、二〇一五年）の「はしがき」に、浦西氏は次のように書いていた。

日本の近代が歩んできた歴史をよく点検し、検証すること  
となくしては、新しい時代を展望し、未来を模索すること  
はできないであろう。

この言葉は、氏がたずさわったすべての書目・事典・年表の仕事に共通して言えることだろう。もちろん『温泉文学事典』も例外ではない。そう考えると、『温泉文学事典』はテーマ設定も良かったにちがいないが、それは裏を返せば、日本の、あるいは自分自身の「歴史」を再発見・再検討したいという読者の潜在的な欲求に対して、本書が（温泉）というアプローチによつて応えたということの意味するだろう。「文化運動」から「温泉文学」まで、民衆にとつての文学・歴史・社会ということを考えて時、書誌学者の目にはどちらも同じように重要なテーマであったにちがいない。

淡々と事実||資料を整理し蓄積し、未来に委ねる。文学と人間への信頼なしにはできないことである。